



空に、うたう（抜粋）

人は、ごく身近な場所で常に新兵教育を受けている。

それは、一個のキリングマシンとしての教育だ。

根拠なき罵声と人格否定は毎日どこにでも転がっていたし、テレビやマンガは悲劇で溢れ、ゲームの画面に向けた銃は、痛みを伴わず死を生みだせた。

しかし、ただ一つ足りないものがある、と誰かは言う。

それは勇気だ。自分を守るためだけではならず、自分をほんの少し、犠牲にすることを可能にする勇気である。

すでに桜は散り始めていた。校門へと続く長い坂道は、桜の花びらが敷き詰められ、固いアスファルトも心なしか優しげである。

安原が通う学校は、桜で囲まれた小高い丘の上にあった。高校生である彼の足にもきつい上り坂を、生徒たちは教科書をはち切れんばかりに詰め込んである鞆と共に上ってくる。その山のような坂を上りきると、空に抱かれ、桜に抱かれた灰色の校舎があった。この地域では最も古い学校で、一部の教室は木の床というほどだ。ステンレスサッシですらない窓枠をはめ込んだ教室も未だにある。机も一部は戦前を思わせるような木の机であった。長い時を経て、生徒たちに刻まれた机の傷が、配られたプリントに引っかかるのも、テストの答案用紙に穴を開けるのもしばしばである。

そのくすんだ校舎も古びた廊下も、入学当時の安原には希望に満ちた場所であった。だが、今では空も桜にも目をくれず、彼は足早にその暗い建物に駆け込むのである。

予鈴が鳴るまでひと眠りできるほどの時間に、安原は登校していた。その方が、生徒たちで詰まった息苦しいバスに乗ることもないし、耳に付く女子高生の甲高い声に悩まされずに済むからだ。

学校に着くと、そのまま教室には行かず、教室とは別棟にある美術室に駆け込むのが、彼の日課になっていた。

「おはよう。今日もいい？」

いつもと変わらぬ美術室の扉を開け、いつもの言葉と共に部屋に入る。

北側に面する美術室は、決して日の光が入り込まないため、いつも絵具や紙の匂いがこもっており、陰鬱な雰囲気漂わせていた。物が生み出される創作の場に、そのような感想を付ければ罵倒されそうで、安原はこの思いつきを誰にも話したことがない。

しかし、そんな閉鎖的な空間を非常に気に入っており、彼としては最大級の賛辞であった。

「おはよう。お前も毎日飽きないね」

教卓の影からのそりと塊が動く。晴れ渡り、穏やかな陽光が降り注ぐ春の日にふさわしい、ゆったりとした動きで、その塊は言った。

「お前さ、いっそ美術部員になれよ。俺より真面目に通ってるんだしさ」

「冗談だろ。俺の美術の成績は一〇段階の三だよ」

安原が自嘲気味に首をすくめると、塊はそりゃひでえ、と言ってからからと笑った。

塊の名は新庄という。れっきとした美術部員だが、他の部員たちが通ってくる放課後には来ず、朝や昼休みにここに来て、気が向いた時に絵を描いている。

安原とは、初学年の時に同じクラスであった。大衆に紛れ込めば、まるで存在が抹殺されてしまう安原に対し、新庄の方は、制服は原形をとどめず改造され、金色に染め上げた長い髪をなびかせて廊下を歩いた。そんな容姿と、彼が持つ一切のハードルを取り払った陽気さが、クラスでもひととき彼を目立たせる道具となっていた。彼に対する安原の印象は非常に悪く、安原の脳が彼の体中に激しい電流を走らせて警告したほどである。

だが、時が経つにつれ、彼は、安原が勝手に想像しているような――この手の派手さを装う人間の軽さ、それは安原が持つ偏見であるが――は、一切持つはおらず、新庄は最初から誰とも交わることなく、あくまで己のペースを守り続けていることに気がついた。

相容れることなどあるはずがないと互いに思っていた二人、少なくともそう決めつけていた安原は、とある事件をきっかけに、こうして新庄と話すようになった。彼は朝早くからここに来るし、新庄も絵を描かない時でも朝は美術室にいるようになった。

そのきっかけとは。

モデルガンである。

それは、町を焼く夏が終わりを告げる頃の、文化祭の日であった。

その日、安原は学校を包む喧騒から逃れるようにして、文化祭の会場になっていない棟を彷徨い歩いていた。

下校までの居場所を探しているのである。もともと内向的で、人と会話をするのが苦手ある安原は、クラスで気配を押し殺して学校生活を送っていた。消えてしまいたいと思いながら教室にいるものだから、誰も話しかけないし、安原から話しかけることもない。そんな安原だから、文化祭の話し合いの際もひっそりと窓際の席に座ったまま、その輪に入ろうとしなかった。クラスにもこの学校にも興味がなく、それゆえにクラスがどんな出し物をするのかも覚えていなかったし、彼に何か役割を与えられているわけでもなかった。

それが公然と許されるほどに、安原はひどくの生気ない存在であった。声をかけられても首を僅かに回転させるだけで、言葉はない。人と接すると、首を絞められているかのようで、声にならないのだ。だからいつも安原は首だけを動かして、彼らとコミュニケーションをとった。

その上安原は帰宅部だ。ますます文化祭は他人事の行事である。

安原は彷徨い続けた。そしてふと、廊下に気持ちのいい風が流れているのに気がついた。

流れの元をたどると、源流は美術室にあった。美術室は文化祭では使用されていない。部員たちは別の場所で作品を展示しているから、この時間帯は誰もいないのである。

ともかくにも落ち着く場所が欲しくて、彼は逃げ込むようにしてその部屋へ入った。

戸を開けるなり、部屋に濁った音が響く。

「やっべ」

教室の背後に並べたてられていた石膏像の一つが、その音と共に僅かに白い粉を吐き出した。

「やべえ、結構もろいんだ」

また声がした。教壇を見ると、学年では有名な“アウトロー”である新庄が、黒光りする銃を手にしているではないか。

「銃」

安原の声は、彼の支配を超えて上ずった。思わず恥ずしさに頬が火照る。

「ああ、見つかったか」

新庄は、安原の動揺など気がつかずにぺろりと舌を出し、

「本物じゃない、モデルガンだよ。まあどっちにしても学校には持ってくるもんじゃないけど」

安原は新庄の言い訳を聞き流して、その銃を見つめていた。

小説や写真で見たことはあったが、本物は見たことがない。モデルガンといえども、あまりに精巧で、黒光りするその体に、彼は興奮した。

「見せてもらってもいいか」

長い沈黙の後、彼の口から出た言葉に、新庄の方が驚いたらしい。新庄はとっさには答えず、目を丸くしたまま安原を凝視している。

「だめか」

感情のない声で言われ、はたと新庄は我に返ったように言った。

「なんだ、声出るんじゃない」

そう思われていたのか、と安原は肩をすくめ、

「好きなんだ、銃が」

と、短い言い訳をした。